

# 伝統芸能「北海道」のあゆみ

## 専門師匠の活躍による

### 都山流の全道拡大

中島聖山

前号では、都山流を取り上げ、各地における同好会の誕生から専門師匠の来道までを概括的に述べたが、今回は北辺の地での専門師匠達の活躍と、都山流の全道拡大の様子について触れてみることにする。

#### 畑中康山による康琳会の結成

北海道帝国大学入学前に、神戸で畑中康山に師事していた中野長俊の仲介により、札幌に篁会（こうかい）が誕生し、更にはその会主である畑中康山が、第2回篁会の演奏会に出演するため、大正9年1月10日の夜遅くに札幌入りしたことは前号で述べたとおりである。

大正9年1月20日付けの北海タイムス（北海道新聞社の前身）は、札幌篁会結成に至る経緯や畑中康山の来札、25日に予定されている演奏会の模様等について報じているが、それによると札幌篁会の活動は、北大の学生だった中野長俊や島谷柳一等が中心になって、大正6年4月頃より始められており、大正9年3月に両名が卒業することもあって、送別演奏会を企画し中尾都山・畑中康山・糸方等を阪神方面より招聘したことが判る。

連日の大雪で全動的な交通マヒ、電信回路の故障の中、1月25日午後5時より錦座（松竹座の前身）で行われた演奏会は、富貴堂音楽部や今井呉服店等の後援を得て開催された。また、地元糸方として横山富貴社中、新田佐美治社中、水口城華社中、池田清江社中等の賛助出演が有り、大規模な演奏会となった。演奏会には出演者全員による国歌「君が代」の演奏に始まり、中尾都山の「夜の懐」の独奏に終わる全20曲のプログラムで行われた。

前半は地元篁会の会員による演奏を中心とし、後半は中尾都山と畑中康山とが交替で演奏した。卒演の記念として中野・島谷の二人は、中尾都山・畑中康山連誓の本曲「朝風」の演奏に続いて古曲「小町」を演奏している。

#### 〈尺八演奏大会プログラム〉

主催・札幌篁会

大正9年1月25日於錦座

- 1、国歌（総員）
- 2、新玉の曲（駒沢・野崎・只野康春）
- 3、摘草（富沢・田沢・仙波康彦）
- 4、銀世界（山口・永井・横山康暁）
- 5、春の曲（寺田・新堂・大谷・鈴木）
- 6、本曲若葉（二部・大谷・富沢・金沢・金津・大森・窓梅康暁・西風風鳴・中野雪翔、一部・新堂・寺田・桑原康波・仙波康彦・猪狩康晴・島谷康登）
- 7、夜々の星（畑中康山）
- 8、秘曲若清水（中尾都山）
- 9、時鳥の曲（富沢・金沢・桑原）
- 10、楫枕（大森・西風・猪狩）
- 11、若葉（中尾都山）
- 12、霜夜（畑中康山）
- 13、寒月（畑中康山）
- 14、磯の春（仙波・横山・只野）
- 15、朝風（中尾都山、畑中康山）
- 16、小町（中野・島谷）
- 17、懐月調（畑中康山）
- 18、残月（中尾都山）
- 19、笹の露（畑中康山）
- 20、夜の懐（中尾都山）

当日の楽屋における中尾都山の様子を、篁会の世話役的存在だった西風福一は「思い出の記」の中で次のように述べている。  
「……愈々当日の呼び物、宗家自慢の『夜の懐』を期待して、時の移るのがもどかしく待つ間、程なく準備室を覗いてみれば、一升

## 尺八篇 その3

瓶2本鎮座する横で、宗家はコップ2〜3杯あおっている。「先生大丈夫ですか」と聞くと、「自作自演の曲やし、やっぱ油が切れると指が動きまへんな。舞台でポーッとほろ酔いが出てきた時が絶頂です。目をつぶってな」と言われた。……（中略）……愈々曲が終わった頃、満場シーンとして拍手もなく、水を打ったような静けさが何十秒か過ぎて、一瞬間いいあわせたように拍手鳴り止まず、いい気分を味わいました」（北海道における都山流尺八楽義展誌「思い出の記」）

流祖中尾都山の演奏は、恐らく札幌の邦楽ファンが初めて聴いた、プロ尺八演奏家による演奏であつたらう。

このように宗家・畑中康山を招聘しての大演奏会は、大成功に終わった。翌日、宗家・畑中・飯田の三師は、揃って大阪へ帰る予定でいた。しかし、今井呉服店から店員慰労のための演奏依頼があつたため、出発を2日遅らせることにし、27日には今井呉服店の3階で、同じプログラムによる演奏会を開催した。


その夜、今井呉服店の近藤支配人の案内で三人は料亭いくよで歓迎を受けた。酒を汲み交わし、宴もたけなわの頃、近藤支配人から「畑中さんのような方が、札幌に欲しいものです。ひとつ北海道の仕事をせられましてはいかがです」と相談を持ちかけられた。これを聞いた宗家が、「畑中君、一つやってみてはいかがです。北海道の仕事は腕次第で大きな事になりますよ」と畑中康山を促したことに、いとも簡単に畑中康山師の札幌派遣が決定したといわれている。

このようなことから、翌28日には宗家と飯田君子の両師は大阪へと帰途に着いたが、畑中康山は、一人札幌に残らなければならなかった。いくら新開地の夢に胸をふくらませていたとはいえ、酔いもさめて冷静さを取り戻していた畑中康山にとって、札幌駅で大阪へ帰っていく両師を見送ったときの心境はどんなであつたらうか。

札幌に残った畑中康山は、約一か月間旅館

**リード21**  
**8000**  
10年更新型  
20倍プラン

### いっだって、家族。



一生生涯保障コース

積立配当金 (いつでも自由に引き出すことができます)

自動更新
------

死亡・高度障害のとき  
**8,000**万円+積立配当金

一生生涯保障  
**400**万円+積立配当金

生活設計の  
**第一生命**  
札幌支社  
電話(011)241-3141

住まいを続けたが、その内、南1条西8丁目  
の三百神社の裏通りに、小さな一戸建てを借  
り「尺八指南」の看板を掲げるとともに、康  
琳会を結成したのである。

### 畑中康山の略歴

畑中康山は本名を儀七といい、播州北条町  
の有名な物産問屋に生まれた。音楽好きだっ  
たとみえ、14歳の頃から尺八を手にし、大阪  
市南久太郎町東雲学校在学中には、同校の助  
手をして松井先生に師事して宗悦流を学  
んだ。時に17歳である。

将来は音楽家を夢見ていたが、21歳のとき  
父が他界したため家督を相続し、家業を継ぐ  
こととなった。しかし、事業に失敗して大正  
2年には姫路市に移転し、親戚の経営する銀  
行に勤めることになった。偶然にもその銀行  
の重役が尺八愛好家だったことから、重役の  
紹介で都山流師匠の森田直芳に入門した。



畑中康山

森田師からは中伝免許状までもらったが、  
大正5年には都合により神戸へ移転したた  
め、出張稽古に来ていた初代北原篁山に転門  
し、奥伝・皆伝と進み大正8年2月の准師範  
試験に登第して康山と号したのである。

神戸時代に教えた学生が、北海道帝大に入  
学したことが契機となり、大正9年1月に渡  
道し、そのまま移住して北海道は勿論、樺太  
までの広大な土地を縦横に歩き回り、都山流  
の普及に努めたことから、初伝免許状を授与  
した数は六百を越えるに至った。

畑中康山が北門の重鎮として、流の内外を  
問わず高く評価されるのはこうした業績によ  
るものである。

### 函館の都山流

大正11年9月に宮川頌山の後を継ぐため、  
宗家の命を受けて舞鶴より来函した用瀬靈山  
は、早速相生町の二戸建てを借り指南を開始

した。用瀬靈山の印象について、根本波山は  
「追憶」と題して「楽韻」（昭33・11）の中  
で次のように語っている。『……先生は物欲  
のない清廉な人であった。胃腸の弱い人で御  
馳走も喜ばなかったし、酒にも弱かった。温  
厚で幽静な人だった。……』

用瀬靈山が指南を開始した当時の月謝は、  
初伝が3円で、中伝・奥伝・皆伝と進むにつ  
れて1円づつ高くなっていった。だから30人の  
弟子がいれば、年若い校長の給料とほぼ同額  
の収入を得ることが出来た。

用瀬靈山は来函と同時に教授を開始し、門  
人の拡大を図るとともに竹霊会を結成して、  
門人と一体となって音楽活動を展開し始め  
た。



函館市公会堂

大正12年3月3日の節句には、函館市公会  
堂で竹田都谿・松岡暁光・上原頌有等とも  
に竹霊会の演奏会を開催している。

大正13年頃、函館師範学校の校医をしてい  
た渡辺鉄太郎（霊瑤）は、亀田方面に10人位  
の門人を集め、仕事から懇意にしていた根本  
波山に指導を依頼した。しかし、根本波山は

多忙を理由に断り、後輩の西村靈谷にこの仕  
事を譲った。

西村靈谷は専売公社に勤めていたが、夕張  
在任のとき、畑中康山の門人となり、中伝免  
許状まで取得していたが、函館転勤と同時に  
用瀬靈山に転門した人である。まだ指南の資  
格を持たない西村靈谷に仕事を譲るに当たっ  
て、根本波山は用瀬靈山に師匠昇格の対応を  
願ひ出たという。竹霊会の中では、技量・人  
格ともに秀でていた根本波山は、代稽古を一  
年間勤めたほどであり、師の信頼も得ていた  
ので計画どおり、西村靈谷は師匠に昇格し、  
亀田方面の門人育成に当たることとなった。

竹霊会の充実とともに、演奏会も毎年行わ  
れるようになった。大正14年6月20日には東  
京から山城曙山を呼び、公会堂で演奏会を開  
催しているし、翌大正15年11月13日には、札  
幌から遠藤検校を招聘し、歓迎の演奏会を開  
催した。

昭和4年7月の流祖中尾都山来函の打合せ  
も兼ね、用瀬靈山は昭和4年5月26日の都山  
流大演奏会視察のため上京した。

### 室蘭の都山流

村垣容山が大正8年6月に大阪から帰り、  
日本製鋼所室蘭工場に復職して教授を開始し  
た。芸道のため休職してまで大阪へのぼるな  
ど努力して指南免許状を取得したがいあつ  
て、門人の数は次第に増え、大正12年まで  
は60名を越える程にまでなった。

村垣容山は当時室蘭で盛んだった琴士古流に  
負けじと、彌生会を結成して地元の方の協  
力を得て、合奏研究会や演奏会に積極的に取  
り組んだ。専門師匠ではなかったが、当時、  
門人の数では函館の用瀬靈山や札幌の畑中康  
山を、遙かに上回っていた。こうした流勢拡  
大の業績により、村垣容山は、大正13年に准  
師範に昇格し、名実共に北海道の中核として  
の地位を獲得した。

彼は門人育成に力を注ぐだけでなく、邦  
楽普及のため演奏会も積極的に開催した。大  
正14年5月27日に製鉄所倶楽部で、会員等と  
彌生会の演奏会を開催したり、翌15年1月に  
は名流大会視察のため上京、同年5月2日に  
は門人横塚容陸開軒披露の演奏会を、母恋の

### 事業内容

- 建築一式工事、とび・土木・コンクリート工事、タイル・れんが・ブ  
ロック工事、ガラス工事・内装仕上工事、建具工事等の請負・設  
計・施工監理
- 建築・土木資材の販売
- 建築・土木資材及器具建具等の輸入・輸出
- 建築・土木資材並びに機材のリース業
- 砂利・砂・碎石の採取販売

# SITY

■ 建築土木資材の総合商社

## シティ・キョードー株式会社

〒062 札幌市豊平区豊平3条8丁目1番26号協同ビル  
TEL(011)811-6777(代) FAX(011)824-5396

共楽座で開催した。また、大正15年8月1日には、札幌から遠藤検校を呼んで、錦座で演奏会を開催したりした。しかし、その後は不況のあおりを受け、門人の数も次第に減少していった。尺八の普及発展には、有名な系方の協力が必要だと考えた村垣容山は、昭和3年に台湾から生田流大検校の川井良都を招聘し、同年11月17日に輪西工場の職員倶楽部で、翌11月18日には御前水の製鉄倶楽部で検校の歓迎演奏会を開催した。しかし、努力のいかにもむなしく、邦楽界の建て直しはならず、わずか1年で検校は台湾へ帰国することとなったが、帰国するにも旅費がなく、検校としては命の次に大切な筆や三絃を売却して旅費としたというから、いかに邦楽が低迷し衰微していたかがわかる。一時は60名を越える門人を抱えていた彌生会も、昭和6年頃にはわずか10数名にまで減ってしまった。しかし、昭和7年9月の東京准師範試験で黒光 山が登第、翌8年7月の札幌准師範試験では飯田羨山が登第するなど、村垣容山の後を継ぐべき室蘭の核となる陣容が整い、次第にその勢力を巻き返すこととなったのである。

### 小樽の都山流

大正15年3月に指南免許状を取得した畑中康山門人の、中桐康薫と中桐康遙の兄弟が教授を開始したのがその始まりとされている。教授開始当時入門した人としては、専売公社の浅地康輔等がいる。しかし、中桐兄弟のことに関しては、昭和7年発行の都山流史に、大正15年3月5日付けで指南免許状を交付した旨記載されているのみで、詳しいことはわからない。

その後、昭和3年春からは、早稲田大学在学中に倉川簾山に師事し、東都会の達人として知られていた高根致山が帰樽し、生田流筆曲の師範だった文子夫人とともに、教授を開始した。

都山流の地盤も出来上がった昭和3年秋には、高根致山の努力もあり、都山流による初めての演奏会が開催された。

大正9年1月、畑中康山の札幌転居とともに入門した金森剛山は、夕張の北海道炭鉱汽船会社を退職し、昭和6年から小樽の犬上商

船に入社して、康琳会小樽支部を結成するとともに、支部長として教授や組織拡充に努力した。更に金森剛山は門人を集め剛風社を結成して、筆・三絃との合奏にも力を注いだ。

### 旭川の都山流

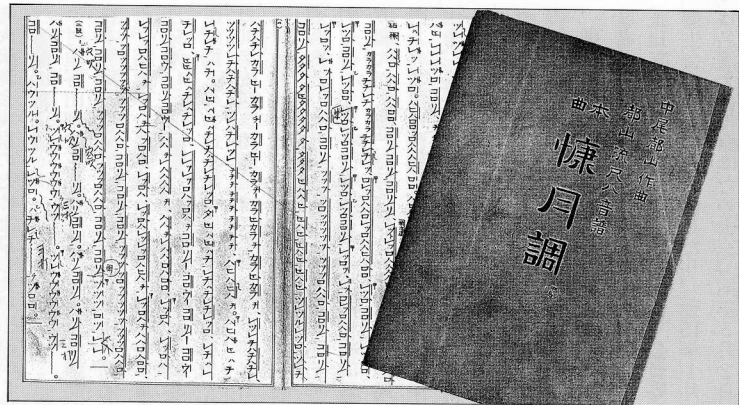
旭川の草分けは、大正9年8月に畑中康山に入門した伊藤彩山であろう。伊藤彩山は農場を経営するかたわら、会社を経営したり金融業をしたりする等、事業化としての手腕を発揮していたが、尺八界でも力量を十分に發揮し、大いに活躍した。入門の翌大正10年2月に指南免許状を取り、大正13年には准師範に昇格していることから、そうした活躍の様子と、畑中康山の信頼が、いかに厚かったかを窺い知ることができる。

伊藤彩山と同じ大正9年8月に、畑中康山の門人となった唯是想山は、恵まれた体格と音楽的才能により、北海道の都山流を背負って立つやに見えたが、楽譜を印刷して門人に販売したことから、畑中康山との間に亀裂が生じ、約7年間破門同然の扱いとなった。

唯是想山は近文に住み、旭川第7師団司令部の土木技師をしていた。仕事のかたわら門人だった星野想波が経営していた明治屋支店の2階を借り、稽古場として「康門想琳会」の看板を掲げ、週2回教えていた。昭和2年当時、門人の数は20名を越え、旭川ではもっとも勢力のある社中だった。その当時、旭川には師範の伊藤彩山を始め、指南の唯是想山・皆川彩峰・根本靈波・富沢康碧等がいた。

昭和3年6月15日、唯是想はその業績により准師範に昇格し、想山を名乗った。同年11月18日には、札幌から師匠の畑中康山を呼び、地元先輩の伊藤彩山の賛助出演を得て、旭川市実科高女講堂で想門康琳会の演奏会を開催した。

唯是想山は体格が良く、物干し竿ほどの太い尺八を吹いていたらしく、彼が和室で尺八を吹くと、障子がブルブル鳴ったといわれている。音楽理論にも通じ、三絃やバイオリンも演奏できた。特に三絃は相当な腕前で、「まの川」程度の曲であれば、自分が三絃を弾いて門人達に合奏練習させることができた。



唯是想山の石版刷り楽譜

当時、都山流の本曲は秘曲といわれ、先生の演奏を聞いて、門人が写譜する形式で教授されていた。しかし、この方法では能率が悪く、週2回の稽古では思うように進まなかったため、唯是想山は門人の写譜を省力化し、稽古の効率化を図ろうと、本曲を石版刷りし、門人に与えたのである。これが師匠の畑中康山に知れたことにより、破門同然となり、以降都山流人としての活躍の道を閉ざされる結果となった。仕方なく唯是想山は新興邦楽会を組織して独立し、その後も尺八を吹き続けた。

昭和10年2月18日に、札幌の今井記念館で新興邦楽会の演奏会を開催した。その時、唯是想山は長男震一（当時11歳）に筆を弾かせ、宮城道雄作曲の「春の海」を演奏した。長男震一とは、数々の名曲を作曲し、世界的に有名な生田流正派の唯是想一である。その後、昭和10年秋、唯是想山の都山流復帰が実現している。

次号へ

おこと・三味線——邦楽専門

# 傑屋楽器店

〒001 札幌市北区新川3条14丁目3-12

☎ (011) 761-9057

● 札専カード・ローンをご利用ください。